

慈雲 心

3号

2006/07

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@nifty.com

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai

爾時世尊 即便微笑

【表紙の言葉】

「爾時世尊 即便微笑」
にしせそん そくへんみじょう

『仏説観無量寿経』

(『真宗聖典』93頁)

「その時に世尊、すなわち微笑したもう」と読みます。

我が子阿闍世あじゃせによつて幽

いだいけ

閉された韋提希はお釈迦さまの説法を聞いて救いを求めて立ち上がりました。それをご覧になったお釈迦さまはにっこりと微笑まれたのです。

いだいけ

です。なぜなら韋提希が救われるだけでなく、これで浄土の門が大きく開かれ未来の衆生が救われる道が示されたからです。

一人の人間が求道に立つことの意味の大きさを知らされます。

何のとりえもない私たちが教えを聞き求道する時、そのまま人類の課題に應えるはたらきを賜るのです。

観經に学ぶ【その一】

これから『観經』を学んでいきたいと思えます。

私たち真宗門徒の拠り所となる經典は三つあります。『仏説無量壽經』、『仏説阿彌陀經』、『観經』、『大經』、『小經』と呼ばれています。三つの經典のうち『観經』だけ“観”と言つ字、つまり観るという動詞が經典の題号に含まれています。観は漢和辞典には「ぐるりと周囲を見まわす、念を入れて見る、注意して見る、觀察する」また「示す、見せる」等とあります。

皆さんもどこかへ旅行したり、観光したりすると思いますが、観光は単なる物見遊山ではなく、その国その土地の文化や生活を觀察してよく知るといふ意味があります。「このように“観”と言つ字は觀る対象となるものを觀てよく知るといふ字なのです。ですから『観無量壽經』は、“無量壽を觀察するお經”といふことではありますが、それは“無量壽”つまり阿彌陀仏とその浄土を觀察して

よく知るといふことなのです。

ここでご開山である親鸞聖人のご解釈をみてみましょう。親鸞聖人は、仏教を学ばれる際に必ず經典にあたられ、一字一字を大切に解釈なさいました。その姿勢にならって私たちもご開山の解釈されたものをみてみます。

お手持ちの『真宗聖典』五四三頁の後ろから三行目です。『一念多念文意』という書物です。

「観仏本願力 遇無空過者（略）」とのたまえり。この文のころは仏の本願力を觀するに、もうおうてむなくすぐるひとなし。（略）

「観」は願力をこころにうかべみるともうす、またしるということころなり。

「仏の本願力を觀るに、遇つてむなく過ぎる者はなし」という『浄土論』の文ですが、ここで親鸞聖人は“観”は願力を心にうかべみることだと仰っています。また知ることだともいわれています。仏さまの本願を知るとは、その本願は日々の事に迷い暮らしている私達のための本願であると信知することです。

そのことが深く自分の身に受けとれた時こころに灯りがともったように喜びとともに温かいものが感じられます。

『仏説観無量壽經』は阿彌陀仏の本願を私達衆生にいかにして知らしめるかというお經です。『観經』にはお浄土や仏さまを觀察する方法が十六通り説かれています。お釈迦さまはお浄土の様々な莊嚴や仏さまのお姿、そのおん身のお飾りなどを順々に説いていけます。それを聞くのは“王舎城の悲劇”の主人公である韋提希夫人です。夫人はその教えに導かれるまま浄土と仏さまを觀察していくのですが、それまで肉眼で見えたと思つていたのがいつのまにか心に本願を感じるようになっていたのです。聖人のお言葉を續いて見てみましょう。

むなくすぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなく生死にとどまることなしとなり。

仏の本願力に遇うことができた人は信心の人である。その人はたとえこの世が生死つまり迷いの世であっても、虚しくそこにとどまらないのである。

【寄稿】

小島正子

深く見よ、そこには必ず美しいものがある」

女学校で国語を習っていた先生が、卒業の時、はなむすに贈って下さった言葉である。先生も又その先生に贈っていた言葉だった言葉とおっしゃっていた。

申し訳ないが、お身体が小さくて、いつもひつまめ髪で地味なお召し物に袴をつけていらっしやうた風采の上がない先生であった。お顔は赤味を帯び生き生きとしていらっしやうたが、お年の頃はわからず、皆が「しいたけ椎茸」といふ仇名を奉っていた。私達が卒業してから何年かしてご結婚なさうたと聞いて「へえー」と思わず言葉が出たが、赤ちゃんがお出来になったと聞いてあゝそんなお年だったのかと思つたものである。飾り気のない真摯な先生であった。

折にふれてこの言葉を思い出す。美術品を見る時も、家にいて庭先を見る時も、日常に使われる道具類を見る時も、また

木々や草花、はては人間関係等々、忘れていた時もあったが、いつしか私の性格の一端となつたのではなからうか。「椎茸」ともうしあげていたが今頃になつて味な先生であつたと感謝している。

平成十八年三月十四日書之

今回、大谷高校で仏教学を学んでいる娘が受けた宗教科期末テストでの問いと解答をあげながら今日現在においてわたくしたち門徒はどう生きてゆくのか学びたいと思います。

【問】ゴータマ・シッダールタが王位を捨てて出家したという出来事は、我々にとどのようなことを教えていると考えられるか。授業での内容をふまえて説明しなさい。

【答】ゴータマ・シッダールタは王子として生まれて物質的にも環境的にも恵まれて育つたが、それらのものだけでは心から満たされることがなかった。そのことから、物質的にどれほど満たされても私たちはそれだけでは満足して生きることができないと教えてくれている。また、シッダールタは妻ができ、子供もできたが、ひとによっては心の拠りどころともいえる家族さえも捨てて出家し

た。なにかを得るには、なにかを捨てなければいけない。捨てたものの大きさは得るものの大きさと同じであることを示してくれている。この事を学んで私はよりシッダールタが出家することを決めたのがすごいことだと感じた。恵まれた環境にいとその中で現状に満足してしまう。

出家とは自分の在り方を問うことです。自分が本当に満足のいく満たされた世界を願うことであり、そのような世界(浄土)にわたしも身をおきたいと願うことです。仏教はこころの底にそのような願いを持ちながらも目の前の物事に気をとられ汲々としているわたくしたちに全く清浄で純粋な世界を教えてください。また法蔵菩薩は、私たち衆生が救われたい限り法蔵菩薩ご自身も仏にならないといわれています。仏さまの願いは、衆生の迷いに比例して衆生の迷いが大きければ大きいほど深いものがあります。仏さまは、どこまでも清浄で純粋なものとは程遠い生き方をしている私たちと共にいます。



【お知らせ】

八月二日（水）午前八時半より

本堂の仏具のお磨きをいたします

九月十九日（火）午前九時より

本堂の仏具のお磨きをいたします

九月二十二日（土）午後二時より

秋季彼岸会の法要を勤修します

十一月八日（水）午前九時より

本堂の仏具のお磨きをいたします

十一月十二日（日）時間未定

報恩講並び

前住職一周忌法要を勤修します

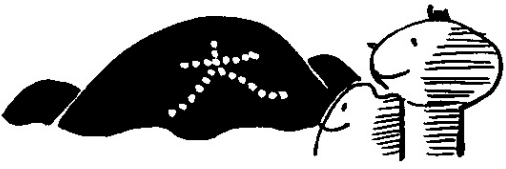


【一口メモ】

お盆について

くわしくは孟蘭盆うらぼんといひます。もとはインドの言語でウランバナという言葉を書いた音写したものです。音写とは音を聞いて漢字にあてはめたものです。お茶などを運ぶお盆とは何の関係もありません。

意識すると倒懸とうげんという言葉で、さかさ吊りの苦痛を意味します。ちょっと恐ろしい言葉ですね。『孟蘭盆経』によりますと仏弟子の目連尊者は死んだ母親が餓鬼世界に堕ち苦しんでいるのを見て、お釈迦さまの教えに従って七月十五日に僧侶たちが懺悔する日にあたり食物などの布施をしたところ、その功德で母親は救われたといひます。



編集後記

平成十二年十月に初めてお経の勉強会としてお寺に伺うようになり、はや六年になるうとしています。

最初はお経の練習に約半年、「正信偈」の解説に約二年、今は「観無量寿経」を学んでいます。

その内容がインドの王宮一族の家庭の様々な出来事を書き記してあり、通俗的な内容なのですがその中に深い意味があり、その意味を住職が詳しく解説して下さり、お経の事を何も知らなかったのですが、考えさせられる事も多く疑問に思うことを住職に伺ったりみんな話しあったりと楽しいひとときになっています。

そして今回「慈雲」の発行のお手伝いをさせていただける事になりました。私の出来る事は出来あがった「慈雲」を封筒に入れる事くらいしか出来ないのですが住職をはじめ若い方々とふれあうことができているひとときを過ごさせていただいています。皆様も是非お寺で一緒にしませんか？

楽しいですよ。お待ちしております。

加藤文字